

## 書籍紹介

### The Return : Fathers, sons, and the land in between

桜井良（社会総合研究所 理事）

リビア出身の作家 Hisham Matar の書いた *The Return* を紹介したい。2017 年にピューリツァー賞（伝記部門）を受賞し、2018 年 11 月に『帰還 父と息子を分かつ国』という題名で人文書院から日本語訳も発刊されている。

#### 本書を知ったきっかけ

私にとってのリビアとは、独裁者カッザーフィーの国、学生時代の友人が石油関係の仕事で行った国、「アラブの春」の後に混乱が続いている遠い遠い国というイメージしかなかった。しかし、ある縁がきっかけで「リビアを知るための 60 章」（第 2 版 編著：塩尻和子）を読む機会があった。この本の中で「帰還」について触れたコラムがあり（147～150 ページ）、少し興味を持った。

#### 読もうと思った動機

興味をもっただけで、それで終わったかもしれない。しかし、その後、オバマ元大統領が退任時に推した本であること、そしてなによりも、私が愛読して止まないカズオ・イシグロ（2017 年にノーベル文学賞受賞）が称賛した作品であることを知り、実際に読むことにした。原本で読みたいと考え、ロンドンの Penguin/Viking 社から取り寄せた。

#### 粗筋

サブタイトルは、”FATHERS, SONS AND THE LAND IN BETWEEEN” とある。つまり、父 (Jaballa) とふたりの息子 (Matar と兄 Ziad) と祖国（リビア）のはざまで翻弄される、家族の物語である。語り手は息子の Matar。

簡単な粗筋はこうだ。1969 年 9 月、カッザーフィーは革命によって前政権を倒した。1970 年、Matar の父（外交官であり貿易商）は国連のリビア代表としてニューヨークに家族とともに赴任し、Matar はそこで生まれた。その後、トリポリに戻るが、父は反政府活動の中心的役割を担うようになったため、政権側から弾圧され、（カッザーフィーの次男 Seif el-Islam が指揮する）秘密警察から追われる身となり、家族とともにケニ

アのナイロビやエジプトに逃れる。そして Matar は、1980 年代半ばからロンドンやニューヨークで教育を受け、リビアから離れた。1990 年、カイロに滞在中の父は何者かに拉致され、行方不明となる。

Matar は、ニューヨークを拠点に父の消息を探し始めるが、依然として詳細は掴めず、ただトリポリにある Abu Salaim 刑務所に収監されたのではないかという情報を得ただけだった。それから 20 年の月日が過ぎる。

2011 年の「アラブの春」の翌年、つまり父が拉致されてから 22 年後、Matar がリビアを離れて 33 年後、やっとリビアの故郷 Ajdabiya やベンガジの地を踏むことが出来た Matar は、親戚や父の友人を訪ね歩き、父の消息を尋ねる。そして、衝撃的な事実を知る。

### 読後感想

本書は、祖国リビアと父を回想する心の旅といえる。

よりよく理解するには、基礎的なリビアの地理や歴史などを知っておくとよい。私にとって幸運だったのは、事前に「リビアを知るための 60 章」を通して、こうした予備知識を仕入れていたことだった。また、Matar が父に想いを馳せるとき、絵画「聖ラウレンティウスの殉教」(ティツィアーノ作)「皇帝マクシミリアンの処刑」(エドゥアル・マネ作)などが効果的に使われている。こうした絵画をネットなどで鑑賞しながら本書を読むと、さらに Matar の心象風景を理解することができるかもしれない。私はそうしながら読んだ。

私はこの本を読んで、カッザーフィー政権に屈せず、レジスタンス活動をした人たちが大勢いることを初めて知った。そして、崇高な生き方をした人々が、残虐な殺され方をしたことも知った。国や民族が異なっても、こうした人々を忘れない。

*The Return* と同じように、カズオ・イシグロの作品の底流には、いつも記憶とその回想が流れている。カズオ・イシグロは、本書を「引き裂かれた家族をめぐる不屈の精神に貫かれた感動的な回想録」と表現している。私は、本書を読んで、この表現がぴったりすると思った。

(注) 日本語でどのようにカタカナ表記されているか、私が知らない人名・地名については、英文のままとした。また、サブタイトルが Fathers と複数形となっているのは、父 Jaballa と息子 Matar と同じような運命を辿った親子が大勢いるためだと理解している。

*The Return* の表紙

